

## 1. 大会全般

### 1) 大会概観

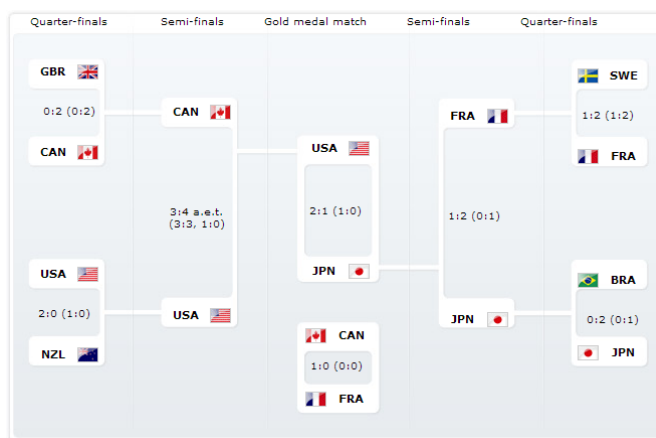


ロンドンオリンピックは、各大陸予選を勝ち抜いた 12 チームが参加し、7 月 25 日から 8 月 9 日までの期間で合計 26 試合がロンドン、コベントリー、グラスゴー、カーディフ、マンチェスター、ニューキャッスルの 6 都市で行われた。グループリーグ序盤こそ、日中の試合は強い日差しと高温の中でのゲームとなったが、その後は過ごしやすい気候の中、良好な環境でのゲームとなった。大会は、12 チームが 3 つのグループリーグに分かれ、各グループ上位 2 チームと 3 位の上位 2 チームが決勝トーナメントに進出した。決勝戦は、前大会優勝国のアメリカと昨年ワールドカップ（以下 W カップと略記）覇者の日本の対戦となった。決勝では、アメリカが日本を 2-1 で下し 2 会連続 4 回目の優勝を飾り、大会の幕を閉じた（アメリカは、5 大会連続の決勝進出）。

なでしこジャパン（日本）は、予選リーグを 2 位通過した後、準々決勝でブラジルを、準決勝でフランスを破り決勝に進出した。決勝ではアメリカに敗れたものの、前大会のベスト 4 から銀メダル獲得へ大きく飛躍した。北京オリンピックからの 4 年間の取り組みが、ドイツ W カップを経て今大会での結果につながったと言えるだろう。

### 2) 大会結果

女子サッカーは、4 年間に二度の世界大会（W カップとオリンピック）が開催される。オリンピックは、W カップ翌年に開催され、各国とも W カップからさらに完成度を増し、文字通り世界最高峰の大会と位置付けられている。今大会では、世界大会でアメリカと覇を競い合ってきたドイツが出場権を失ったものの、フランスやイギリス（イングランドチームにスコットランドの 2 名が加入）が新たな勢力として台頭や、古豪カナダが銅メダルを獲得しての復活など、世界的な競技力の成長が印象づけられた。ベスト 4 にはアメリカ、日本、カナダ、フランスが、ベスト 8 には他にスウェーデン、ニュージーランド、イギリス、ブラジルが進出し、コレクティブなサッカーを志向する欧米チームが世界の女子サッカーのけん引役であることが、W カップ同様に示された。



GROUP E

Team	MP	W	D	L	GF	GA	Pts
Great Britain	3	3	0	0	5	0	9
Brazil	3	2	0	1	6	1	6
New Zealand	3	1	0	2	3	3	3
Cameroon	3	0	0	3	1	11	0

GROUP G

Team	MP	W	D	L	GF	GA	Pts
USA	3	3	0	0	8	2	9
France	3	2	0	1	8	4	6
Korea DPR	3	1	0	2	2	6	3
Colombia	3	0	0	3	0	6	0

GROUP F

Team	MP	W	D	L	GF	GA	Pts
Sweden	3	1	2	0	6	3	5
Japan	3	1	2	0	2	1	5
Canada	3	1	1	1	6	4	4
South Africa	3	0	1	2	1	7	1

## 2. 技術・戦術分析

### 1) 大会の傾向とトピック

#### コレクティブフットボールへの挑戦と更なる前進

昨年の W カップでは、上位進出国を中心に、攻守分業や個の力に依存するサッカーからコレクティブフットボールへ急進した。本大会でもその傾向は続き、上位進出国以外にもコレクティブフットボールへと挑戦するチームが増えた。加えて上位進出国では、攻守にわたりコレクティブフットボールの質をさらに高めようとする取り組みと着実な成長が確かめられた。

#### 強みを活かしたプレースタイルの構築

コレクティブな守備の向上により、突出した個の能力に依存した突破だけでは、相手を打ち破ることが困難となっている。本大会では、W カップ時に顕在化したその解決策として、複数の選手が効果的に関わり突破の選択肢を増やす「コレクティブな攻撃」を志向するチームが増加した。また上位国では、コレクティブな攻撃を実現するプロセスで、それぞれの強みを活かしたプレースタイル確立への試行錯誤を経て、現時点での最善のスタイルを構築してきた。北京オリンピックでは、女子サッカーのトレンドを「よりテクニカルに。よりスピーディーに。よりタフに。」と捉え、自国のプレーモデルをシフトチェンジしたチームが主流となったと分析した（JFA, 2009）。本大会では、多くの国が攻守一体となったフットボールを志向する中で、チーム全員が協働し効率性や機能性を高める「コレクティブ」な要素の重要性がさらに高まったといえる。

ここでは、上位進出国のプレーモデルについて概説する。

#### アメリカ

優勝したアメリカは、ワールドカップ後自らの強みである「パワフルでダイナミックな攻撃」を抑制し、DF ラインから丁寧にパスをつなぎビルドアップすることを攻撃の中心戦略に据え、コレクティブな攻撃をより進化させることを企図していた。しかし大会に際しては、ワールドカップでの雪辱を期し、自らの強みであるパワフルでダイナミックな攻撃を中心に据えた現実的な攻撃戦略へと軌道修正を施した。しかし、アメリカのコレクティブな攻撃への継続的な取り組みは、ロイド、ボックス、



ラピノなど確かなテクニックを持つ MF を中心に攻撃の選択肢を増加させ、状況に応じたファストブレイクとビルドアップの選択を可能にしていた。試合の中で攻撃のテンポを変化させることで、前線のワンバックとモーガンという傑出した個の能力を持つアタッカーの特性を、より効果的に活かすことに成功していた。また無駄なボールロストを減らしボールポゼッションの時間を増やすことは、試合を通して体力の消耗を抑えることにつながっていた。このことは、アメリカが大会を通じてトップフォームで戦うことを可能にし、優勝に寄与したものと考えられる。また守備では、個人の高い守備能力をベースに 3 ラインをコンパクトに保ち、状況に応じた守備デザインの選択からハイプレッシャーな状況を作り出し、ゲームの主導権を握った。

## 日本

チーム全員が連携連動して相手のボールを奪うコレクティブな守備から、ボール奪取後は素早くゴールを目指す。またファストブレイクが封じられた場合には、ハイプレッシャーの中でも慌てず、人とボールが動きながら複数の選手が効果的に関わるビルドアップから、相手を攻略することができていた。守備では、ボールや試合状況に応じ守備デザインを変更する中で、粘り強く相手の攻撃に対応できていた。また攻め込まれる時間帯でも集中力を切らすことなく、相手のわずかな隙を逃さずゴールに結びつける「したたかな試合運び」ができるようになった。

## カナダ

3位には、攻守にわたりコレクティブなサッカーへと取り組む古豪カナダが復活した。守備ではMFの豊富な運動量に支えられた4-3-3のコレクティブな守備で、相手を意図的にサイドへ追い込んでボールを奪っていた。ボール奪取後は、素早いファストブレイクに加え、DFからのビルドアップを志向しつつ、相手のプレッシングが強くなると、パワフルなターゲットを活用し、シンクレアという傑出した個の能力を最大限に生かすコレクティブな攻撃に挑戦していた。アタッキングサードでは、サイドからのクロスボールを多用し、自らの強みである高さとパワーを活かした攻撃戦略を採っていた。



© J.LEAGUE PHOTOS

## フランス

4位に終わったフランスは、攻守が一体となったコレクティブなサッカーを披露した。多くの選手が確かなテクニックでブロックの内側へとボールを運び、ワイドにボールを展開しながら攻撃に関わることで、スピードある選手を活かし相手のサイドを巧みに攻略していた。また多くの選手がバランスよく攻撃に関わることで、ボールを失った直後に素早く効率的にボールを奪い返し、効果的な2次攻撃を実現していた。フランスは、決定的チャンスを決めきれず4位に甘んじたが、本大会では最もコレクティブなサッカーを体現したチームといっても過言ではないだろう。



© J.LEAGUE PHOTOS

## ブラジル

ブラジルは、準々決勝で日本に敗れたものの、個々のサッカー理解、相手との駆け引きを伴うテクニックでは、世界のトップレベルにあることを改めて示した。しかし皮肉にも、高い個々の判断と能力に依存するサッカーの限界を示す大会となってしまった。攻撃では、個々のプレースピードが遅く、マルタやクリスチアーネなどの傑出した個の能力が相手のコレクティブな守備で封じられ突破口を見いだせなかった。守備では、個の能力に依存したマンツーマンディフェンスを基本にするため、選手間の距離が開き過ぎることで、相手のモビリティに対応できず空いたスペースを突かれ失点を重ねた。



## 2) 守備

### コレクティブな守備の向上

本大会では、マンツーマンディフェンスを基本戦略に採用するブラジルやアフリカのチームを除き、すべての国が4バックを基本として、FW、MF、DF、GKが協働して意図的に相手ボールを奪う戦略が主流となっていた。Wカップから継続的にコレクティブな守備に取り組んできたチームでは、攻守の切り替えに加え、チーム全員の連携連動した動きがスムーズにスピードアップし、チームとして意図的にボール奪うプレーの質が高まっていた。

### 状況に応じた守備デザイン

本大会で上位進出したチームでは、チャンスがあれば前線の高い位置から積極的にプレッシングを行い、状況の悪い場合にはディレイしながら守備ブロックを素早く構築していた。すなわち、ボールの奪いどころをあらかじめデザインした守備方式だけでなく、状況に合わせて臨機応変に守備デザインの変更を行っていた。このことは、個の適切な判断にとどまらず、チームとしてボール状況に合わせた守備デザインの変更が上位進出に必要となっていることを示した。

### コレクティブな守備を支える個の能力

上位進出チームでは、チームとしてのコレクティブな守備の質が高まっていた。一方、個の判断やテクニックが未熟なチームでは、チームとしての守備オーガナイズは共有されているものの、個々の判断ミスや守備能力の不足で容易に相手の突破を許す場面が散見された。このことは、高いレベルの個の守備能力が、コレクティブな守備の実現には必要不可欠なことを再認識させた。

### 切り替えのスピードと強度の増大

本大会では、攻から守の切り替えのスピードとともに、その強度も増大した。そのため、守備と攻撃が分離したプレー、すなわちボール奪取後に攻撃の準備を始めるプレーでは、相手に強固な守備ブロック構築を許してしまい、有効な攻撃を創出することが困難となっていた。

表1、2で示すように、アテネ大会（2004年）から大会ごとに総得点数が増えており、チームの攻撃意識と個のテクニックの向上が推察できる。また本大会では、オープンプレーからの得点数が減少しセットプレーからの得点数が増加していた。これは、コレクティブな守備の進展により強固な組織的守備構築が進んでおり、流れの中からの得点が困難となっていることを示している。特にベスト8以降の対戦（決勝トーナメント）つまり世界のトップレベルでその傾向が顕著であり、すでに世界のトップレベルではコレクティブな守備が高いレベルで実践されている。そのため、傑出した個の力に依存した攻撃や安易なビルドアップでは、もはや容易に相手守備組織を突破し得点を奪うことは困難となっていることが明らかとなった。

表1 オリンピックにおけるステージ別得点と割合

	グループステージ	決勝トーナメント	合計
アテネ大会 2004	33 (60.0%)	22 (40.0%)	55 (100%)
北京大会 2008	42 (63.6%)	24 (36.4%)	66 (100%)
ロンドン大会 2012	48 (67.6%)	23 (32.4%)	71 (100%)

表2 オリンピックにおけるオープンプレーとセットプレーの得点と割合

	オープンプレー	セットプレー	合計
アテネ大会 2004	44 (80.0%)	11 (20.0%)	55 (100%)
北京大会 2008	55 (83.3%)	11 (16.7%)	66 (100%)
ロンドン大会 2012	52 (73.2%)	19 (26.8%)	71 (100%)

(データはFIFA Report and statistics, 2008; FIFA Technical report and statistics, 2012より引用)

表3 オリンピックの決勝トーナメントにおけるオープンプレーとセットプレーの得点と割合

	オープンプレー	セットプレー	合計
アテネ大会 2004	17 (77.3%)	5 (22.7%)	22 (100%)
北京大会 2008	20 (83.3%)	4 (16.7%)	24 (100%)
ロンドン大会 2012	15 (65.2%)	8 (34.8%)	23 (100%)

(データはFIFA Report and statistics, 2008; FIFA Technical report and statistics, 2012より引用)

### 3) スピーディーな攻守の一体性

本大会では、攻守の切り替え局面で、選手個々の切り替えの意識が高まるとともに、上位進出国の多くは、チームとして戦略的に攻守の切り替えをデザインしていた。

#### 意図的な守備からのファストブレイク

コレクティブな守備が主流となる中、相手の守備組織が整う前に素早くゴールを目指すファストブレイクは攻撃の有効な手段となる。本大会では、傑出した個のスピードやテクニックだけに依存するのではなく、守備局面から意図的に相手を誘導し、ボール奪取後は複数の選手がコレクティブに関わるファストブレイクを狙う。その中で、傑出した個の能力を活用するプレーが多くみられた。このことは、守備から攻撃への一体化した戦略の発展を示すとともに、もはや傑出した個であっても、1人ではコレクティブな守備を突破することが困難になっていることを強く印象づけた。

#### カウンターアタックへのカウンター

フランスや日本、アメリカは、多くの選手がバランスよく攻撃に関わることで、ボールを失った直後から複数の選手が効率よくボールを囲い込み、ボールを再び奪い返す場面がみられた。この戦略は、コレクティブで積極的な攻撃の中で、互いの選手の距離やバランスを適切に保つことにより、相手に有効なカウンターをさせないこと、加えて効率的にボールを奪い返し守備時に走る距離の短縮を可能にする。

フランスや日本についても、上記の戦略が実現できる機会は未だ多いとは言えない。また多くの国では、個の攻撃からの素早い切り替えで、相手の攻撃を遅らせ、その間に守備ブロックを構築することが多く見受けられた。しかし、コレクティブな攻撃が進んでいく傾向の中、今後は効率的な守備を意図した攻撃のデザイン、すなわち攻守一体となったプレー戦略の重要性が高まることが推察される。

#### 4) 攻撃

##### ビルドアップ志向とターゲットを活用した攻撃

本大会では、攻守の切り替えが早くなり、ファストブレイクを封じながら、素早く守備ブロックを構築できるチームが増えていた。このように強固でコレクティブな守備が主流となる中でも、前線選手のパワーとスピードだけに依存したロングボールを多用するチームは影を潜め、多くの国がDFラインからボールを丁寧に動かしながら攻撃をビルドアップすることに挑戦していた。確かに、個々のテクニック不足からのミスも散見されたが、チームとしてビルドアップへ取り組み、ボールを動かすテクニックは確実に向上していた。

ビルドアップ能力の向上に伴い、相手守備ブロックの外側ではボールを運べるチームが増えた。しかし、バイタルエリアなど相手守備ブロックの内側へボールを効果的に運ぶことのできるチームは未だ少なかった。そのため、GKからビルドアップを志向しつつも、相手のプレッシングが強まるエリアでは、前線の選手をターゲットとして起点を作り、複数の選手が素早くサポートすることで相手守備を攻略する「現実的（割り切った）戦略」を採るチームが多くみられた。本大会では、多くのチームがコレクティブな攻撃への移行期にあり、ビルドアップに必要なテクニックをチーム全員が獲得していない状態にあった。そのため、現有のチーム力で効果的に相手を突破する方法として、「ターゲットプレイヤーの活用」は必要な条件となっていた。

##### チームワークの中で活かされる傑出した個

本大会におけるコレクティブな守備を前にして、個の能力にだけ依存した限られた選択肢では、傑出した個の能力をもってしても突破が困難となっていた。そこで、ファストブレイクだけでなく、ビルドアップの中で相手を意図的に動かし、守備のバランスを崩した相手に対し個のスピードやテクニックを活かす攻撃が必要になっていた。上位進出を果たしたアメリカやフランス、カナダは、これらコレクティブな攻撃の中で、スピードのある選手を有効に生かし相手を突破することができていた。

##### サイドアタックの成長

本大会では、Wカップに続き、コレクティブな守備を取り入れるチームの増加と組織的協働の質が向上したことにより、バイタルエリアを含む守備組織中央の攻略が困難となっていた。そのため、サイドを起点にした攻撃が増加した。Wカップでは、ミドルサードのサイドエリアを起点とし、中央へのロングクロスやパスにより、相手の背後やバイタルエリアを攻略した得点が多くみられた。しかし本大会では、アタッキングサードのサイドエリアを攻略した得点が多くみられた。この要因の一つとして、コレクティブな守備の成長でミドルサードへのプレッシャーが強まり、そのエリアを攻撃の起点とすることが困難になったことが挙げられる。

##### サイドアタックのバリエーション

本大会では、サイドの深いゾーンを攻略するため、意図的な守備からのファストブレイクで、複数の選手が関わりながら素早くサイドを突破するプレーが多くみられた。またフランスや日本、ブラジルは、ビルドアップの中で意図的に相手を一方のサイドに集中させ、サイドチェンジから効果的にサイドを攻略するプレーを実践し、サイドアタックのバリエーションの多様化がみられた。



このことは、単なる個のスピードやテクニックに依存して突破を図るのではなく、複数の選手が効果的に関わるコレクティブな攻撃を体現できるチームが増えていることを示した。また相手のコレクティブな守備による強固な守備ブロック構築後でも、ブロックの内側へボールを運び突破を図ることの出来るチームが増えてきたことを示しており注目に値する。今後は、攻守の切り替えがさらにスピーディーとなりコレクティブな守備が整備され、ファストブレイクによる突破はますます困難になるであろう。その際には、ブロックの外側からのロングクロスだけでなく、バイタルエリアなどブロックの内側へ巧みにボールを運び、意図的に突破の糸口を作り出していくことが必要となろう。

#### **クロス**の質とゴール前の動きの向上

本大会では、サイドアタックからの得点が、Wカップに比較して??%増加した。この要因として、クロスボールに関するキックの質の向上が挙げられる。クロス

の質が高まったことにより、数的不利な状況でも、ゴール前に走りこむ選手と意図を共有することでゴールを奪うことができていた。今後は、ゴール前の攻防がさらに緻密化していくことが推察される。

### 3. アジアの現在地

---

#### 1) 北朝鮮の戦い

本大会に日本とともに出場した北朝鮮は、確かなテクニックとチームオーガナイズ、そしてアジアでは優位に立つフィジカルアビリティを強みに、アメリカ、フランス、コロンビアとグループリーグで対戦した。その結果、コロンビアに勝利したものの、アメリカとフランスに対しては、試合の主導権を握れず敗戦に終わった。北朝鮮は、U17やU20のWカップなど育成年代では世界の舞台で着実な実績を残している。育成年代で優位に立つ北朝鮮が、フル代表の戦いで十分な実績を残せない現状からは、コレクティブ化が進む世界のサッカーの中でアジアの国々が検討すべき多くの示唆が与えられる。

#### 2) 強みを活かしたプレースタイルの構築

個の育成を優先する国が多い育成年代の大会では、しっかりした個のベースをもとにチームワークを早期に取り入れたチームが優位に立てることが多い。しかし、フル代表ではチームワークを基本としたコレクティブフットボールが更なる前進を遂げる中、身体

の大きさやパワーで勝る欧米の相手に対し、育成年代での先んじたチームワークのアドバンテージは消失してしまう。つまり、アジアでの戦いの中だけでなく、世界の強豪国と戦うことを見据えたうえで、心・技・体に関する自らの「強み」となる要素を分析し高めていくことが重要になる。そして、自らの強みを活かし、世界で戦うためのプレースタイルを構築していくことが必要不可欠になろう。身体

の大きさとパワーで優位に立つ相手のコレクティブフットボールに対峙していくために、どのような戦略が必要となるのであろうか。日本をはじめアジアのチームは、この課題にそれぞれの立場で向き合っていくことが求められよう。



#### 4. 日本の現在地と近未来：3年後のWカップを見据えた成果と課題

なでしこジャパンは、Wカップでの優勝に続き、ロンドンオリンピックでも銀メダルを獲得することができた。この成果は、これまで日本の女子サッカーに関わってきたすべてのサッカー関係者の努力の蓄積の賜物であることは間違いない。なでしこジャパンの表現してくれたテクニカルでコレクティブなフットボールは、多くの国々から高く評価されている。しかし、



個の力でゴールを奪われ敗れた決勝戦に見られるように、コレクティブフットボールへと移行する女子サッカーのトレンドの中で、現在日本の持つアドバンテージは次第にその効力を失っていくであろう。そのことを踏まえ、ここでは3年後に迫るWカップを視野に、本大会の日本の成果と課題について考えていきたい。

##### 1) コレクティブフットボールの更なる前進

攻守にわたりコレクティブフットボールを志向するチームが主流となる中で、日本は最も早くコレクティブフットボールに取り組んだチームの1つである。日本は、そのアドバンテージを活かし、チームとして連携・連動するプレーをWカップ時よりもさらに前進させた。

##### 2) 選手、そしてチームとしての成熟：しぶとく勝ちきる試合運び

ワールドカップでの優勝という経験値は、なでしこジャパンの選手たちを、そしてチームを大きく成長させていた。選手たちは、アメリカやブラジルなどの強豪国に対しても、攻守にわたり臆することなく対峙できていた。相手のプレッシャーにも慌てず、状況に応じて選手たち自ら攻守にわたりコレクティブフットボールを続けられる時間帯が増大した。

また今大会の大きな成果の一つに、相手にボールを支配されても、慌てず粘り強くゴールを守り、数少ないチャンスをゴールに結びつける「しぶとく勝ちきる試合運び」ができたことが挙げられる。ワールドカップ優勝の自信と経験知が、ピンチとチャンスを感じ取る力を成長させ、賢く駆け引きのある試合運びを可能にしたものと考えられる。



### 3) 守備の成果

#### 状況に応じた守備デザインの選択と対応

本大会の上位進出チームでは、1つの守備デザインではなく、ボール状況や試合の状況に合わせ臨機応変に守備デザインを変更できていた。日本も同様に、選手自らが状況に応じ守備デザインを変更し、チームとしてコレクティブな守備を実現できていた。

#### オフザボールでの意図的なプレー誘導

身体の小さな選手の多い日本では、自身のプレー範囲を広げることが重要となる。その1つの解決策としてスライディングの活用が注目されている。もう1つの重要な改善策として、オフザボールでの適切なポジショニング、そしてさらに進んで「駆け引き」の中から相手を意図する方向へ誘導するプレーが挙げられる。本大会では、すべての選手が、オフザボールで観ることにより前後左右の情報を収集し、チーム全体で適切なポジションをとり、良い準備のできた選手が駆け引きの中からボールを意図的に誘い込んで奪うシーンが多くみられた。



### 4) 守備の課題

#### 状況の悪い場合の判断と対応

日本選手のボール状況に応じた適切な判断と対応力は向上していた。しかし、スピードのある相手への対応は大きな課題となった。相手にスピードを出させない対応や、スピードになられても慌てずにスピードを吸収しながら粘り強く対応する能力を高めていくことが必要となろう。また、自らの意図を上回るプレーで相手が優位な状況に立った場合、慌ててボールに飛び込むなど、瞬時に適切な判断や対応が取れず危機的状況を作り出してしまう場面が散見された。相手が優位な状況に立った時こそ、冷静かつ瞬時に適切な判断と対応が必要となる。瞬時に危機を察知し対応できる能力の向上が、世界のトップレベルと戦う際の課題として顕在化した。

#### 強くボールを奪いきる

スライディングの有効な活用など、個人やグループでボール奪う能力は大きく向上していた。しかし、ゴール前や中盤で人数をかけて相手を囲い込む場面でボールを奪いきれず、手薄なエリアを攻略されピンチを迎える場面が散見された。日本のコレクティブな守備が他国に分析される中、相手はその守備を回避し突破する方策を講じてきている。コレクティブな守備のなかでも、しっかりと個で強くボールを奪いきる能力の向上が必要不可欠であろう。

#### ロングボールに対するヘディング

高さのあるターゲットへのロングボール対応も課題の1つであった。継続的取り組みにより、競り合いの中で相手に自由にヘディングさせない対応やカバーリングは改善されつつあった。しかし、ヘディングボールをしっかりクリアする、あるいは正確に味方にヘディングし攻撃につなげることは今後も継続的に取り組んでいくことが必要であろう。

#### ミドルシュートへの対応

世界の女子サッカーでは、キックの質が向上しシュートレンジが長くなっている。国内ではシュートを選択しないエリアでも、世界大会では躊躇なく強力で正確なミドルシュートが放たれる場面が多い。GKを含め、ミドルシュートに対応する意識とアプローチやブロックのテクニックを高めることが求められよう。

## 5) 攻撃の成果

### ビルドアップからの突破

本大会のなでしこジャパンは、相手の厳しいプレッシャーの中でも慌てることなく、人とボールが動く中で攻撃を組み立て、複数の選手が効果的に関わり相手のゴール前までボールを運ぶことができていた。このことは、ボールを受ける前の良い準備とボールを受けてからのテクニック、そして複数の選手の関わりが向上したことを示している。また相手の守備ブロックの内側へボールを動かしながら、オフザボールでの積極的なアクションにより効果的な突破を図れる場面も多くみられた。バイタルエリアなど相手の守備ブロックの内側を攻略できる能力では、フランスと並び世界のトップレベルに成長したといえるであろう。

### 個の駆け引き

幅と厚みを持つ広がりを持ったポジショニングとパス交換だけでは、強固な守備ブロックを崩すことはできない。ボールの置き所や相手を惑わせるポジションからのアクション

で、意図的に相手選手を動かし、守備のほころびを創り出すことが可能となる。本大会の日本選手は、このような賢く駆け引きをする中で、相手に守備のほころびを作り出し、優位な状況を作り出す中で相手を突破できるシーンが見られた。「賢く駆け引き」できることは、日本が世界に対して活かせる「大きな強み、そして武器」となる。日本のコレクティブフットボールには、攻守にわたり「賢く駆け引き」できる能力が必要不可欠であり、さらに向上させていくことが必要不可欠となる。



## 6) 攻撃の課題

### ファストブレイクの質

日本は、コレクティブな守備から素早い攻撃への切り替えで、相手の守備ブロック形成前に効果的なファストブレイクのチャンスを多く作り出していた。しかし、ボールを持つ選手の判断や他の選手の関わりが遅れにより、せっかくのチャンスを活かすきれない場面も多くみられた。今後は攻守の切り替えとともに、コレクティブな守備が発展していくことが予測される。限られたファストブレイクのチャンスを活かすため、ボールを持つ選手の適切な判断と推進力、関わる選手の数と関わりを高めることが大きな課題となる。

### ゴール前で勝負を決するテクニック

日本は、ファストブレイクやビルドアップの中から、相手を突破しゴールを奪うチャンスを多く作り出せるようになっていた。しかし、突破場面におけるパスの出し手と受け手のタイミングが合わない、あるいはパスやコントロールのミスによりチャンスを活かせない場面が多くみられた。特にスピードに乗ったなかでの確かなテクニックは大きな課題として挙げられる。

また自陣ゴール前で、状況に応じた冷静な判断や適切な対応ができないため、失点場面以外にも失点の危機を迎える場面も散見された。ロングクロスの対応など、ゴール前の攻防に改善がみられる要素もあるものの、ゴール前の守備能力の向上は大きな課題となった。

ゴール前は勝負を決する主戦場である。世界の拮抗した戦いの中では、ゴール前のテクニックが勝負の別れ目になる。厳しいプレッシャーの中でも、冷静沈着かつ瞬時に適切な判断と対応を可能にする「攻守のゴール前のテクニックの改善」が非常に重要な課題である。

### 賢い駆け引き：オンでもオフでも、個でもチームでも

なでしこジャパンの選手たちは、賢い駆け引きから、相手を意図的に誘導してボールを奪い、素早く相手ゴールに迫るプレーが増えてきた。またビルドアップでは、連携連動した関わりの中で、相手を意図的に動かし強固な守備ブロックを攻略できるプレーも増えていた。しかし、攻守にわたり相手のクリエイティブなプレーの質が高まることが推察される今後は、オンでもオフでも、また個人だけでなくグループやチームとして賢く駆け引きのできる選手、そして賢く駆け引きしたプレーを増やしていくことが急務となる。

## 7) セットプレー

本大会では、日本の7得点中の3点がセットプレーからであった。またセットプレーからの失点はなかった。Wカップでもセットプレーからは無失点であったことを考えると、身体の大きさに上回る相手に対し、セットプレーは日本の弱みとなっておらず、引き続き攻撃では強みとなっていることが分かる（チーム別選手の平均身長で12チーム11番目：162.9cm）。これは、宮間選手という高い精度のキックテクニックを持つ選手を日本が有すること、また世界の強豪についてもセットプレーの守備にはつけ入るすきがあることを示している。





## 5. まとめ

ドイツワールドカップから1年後のロンドンオリンピックでも、多くの国がコレクティブなサッカーへ挑戦を続けていることが確認された。もはや傑出した選手に過度に依存したサッカーでは、世界大会では勝ち抜けないことも明らかとなった。またコレクティブなサッカーを志向する中で、それぞれの国が自らの特徴を強みとして活かし、独自のプレースタイルを構築していた。現時点では、攻守にわたるテクニックが未成熟なチームが多く、日本はいち早くコレクティブなサッカーに取り組んだことにより、他の国に対してアドバンテージを得ていた。しかしアメリカをはじめ多くの国では、育成年代選手の育成環境の改善と整備が急速に進んでいる。今後は、各国の整備された育成環境から、確かなテクニックを備えた選手が成長してくることは想像に難くない。また本大会には、トップレベルの育成環境が整備され世界のトップリーダーであり続けるドイツが出場していなかったことも見逃していけない。

今後は、テクニックの課題を克服した国々がコレクティブなサッカーに継続的に取り組んでくると推察される。我々日本は、その中で自らの特性を強みとして発揮し続けられるよう、個の育成とチームとしての強化に計測的に取り組むことが、世界で戦い続けていくために必要不可欠であろう。

